

# 戴国カレンダー

本表

作成者：ほしなみ

作成日：2021年9月11日





# 戴国カレンダー

作成者：ほしなみ (@hoshinami629)

2021/9/12

元号	年・置閏月	月	季節	二十四節気	七十二候	出来事	参照章・節	参照箇所 (新潮版)	備考
和元	22年	1月	春			宰輔失道、驕王崩御 泰果結実。五山に蝕			
	30年 章首 (閏10)					朽椈、この頃土匪として独立	八章4節	白銀② P.113	閏10月の次の11月の中気である冬至は必ず月初(朔の日)に来る。朔旦冬至
	31年								
	32年	12月	冬	小寒 7~9日 大寒 22~24日					
	33年 (閏6)	1月	春	立春 10~12日 雨水 25~27日	大寒次候 鶯鳥厲疾 大寒末候 水沢腹堅 立春初候 東風解凍 立春次候 蟄虫始振 立春末候 魚上氷 雨水初候 獺祭魚	泰麒蓬山に帰還、黄旗掲揚	風海 『戴史午書』 白銀二章1節	風海 P.378 白銀① P.54	左記の通り驕宗即位の年の記述が二通り存在する。この表では『白銀の墟 玄の月』の記述を採用する。
		2月	春	啓蟄 10~12日 春分 25~27日	雨水次候 鴻雁来 雨水末候 草木萌動 啓蟄初候 桃始華 啓蟄次候 倉庚鳴 啓蟄末候 鷹化為鳩 春分初候 玄鳥至	下旬 令乾門開門			
		3月	春	清明 13~15日 穀雨 28~30日	春分次候 雷乃発声 春分末候 始雷 清明初候 桐始華 清明次候 田鼠化為鴽 清明末候 虹始見 穀雨初候 萍始生	下旬? 翻孫、泰麒を生け捕りにしようとする	四章3節	風海 P.109	
		4月	夏	立夏 13~15日 小満 28~30日	穀雨次候 鳴鳩抃其羽 穀雨末候 戴勝降于桑 立夏初候 蟪蛄鳴 立夏次候 蚯蚓出 立夏末候 王瓜生 小満初候 苦菜秀				
		5月	夏	芒種 13~15日 夏至 28~30日	小満次候 靡草死 小満末候 小暑至 芒種初候 螳螂生 芒種次候 鵙始鳴 芒種末候 反舌無声 夏至初候 鹿角解	上旬~中旬 景麒、蓬山来訪 下旬 令坤門開門。驕宗・李斎、黄海に入る。 景麒、慶国へ帰る			
		6月	夏	小暑 15・16日 大暑 29・30日	夏至次候 蟪蛄鳴 夏至末候 半夏生 小暑初候 温風至 小暑次候 蟋蟀居壁 小暑末候 鷹乃學習 大暑初候 腐草為螢	下旬 蓬山に昇山者来訪。泰麒、李斎や驕宗と知り合う	七章1節	風海 P.194	夏至を過ぎて1ヶ月経たない頃に、昇山者が到着し始めている。夏至から1ヶ月経過未済で甫渡宮開扉、その2日後に李斎に、更にその数日後(3、4日後?)に驕宗と知り合う。驕宗と知り合った日が概ね大暑頃か。
	閏6月	秋	立秋 15・16日	大暑次候 土潤溽暑 大暑末候 大雨時行 立秋初候 涼風至 立秋次候 白露降 立秋末候 寒蟬鳴	中旬 甫渡宮閉扉、傲濫を折伏 中旬~下旬 泰麒、驕宗に叩頭 下旬 李斎下山。泰麒と驕宗、天勅を受け戴へ移る	風海 八章3節・ 十章1節・ 十一章1節 白銀二章1節	白銀① P.54 風海 P.236 同P.289 同P.316	甫渡宮閉扉が概ね立秋頃と見ると、折伏は立秋の1日後。李斎への見舞いは折伏の数日後で、その夜に転変・叩頭。驕宗・泰麒が吉日を待つ間に李斎が下山。	
	7月	秋	処暑 1日 白露 16日	処暑初候 鷹乃祭鳥 処暑次候 天地始肅 処暑末候 禾乃登 白露初候 鴻雁来 白露次候 玄鳥帰 白露末候 羣鳥養羞	上旬~中旬? 景麒、戴を来訪	十二章4節	風海 P.349	景麒の発言から、秋が来ていると考える。夏ならば「涼しい」と言うのではないかと想像。	

元号	年・ 置閏月	月	季 節	二十四 節気	七十二候	出来事	参照章 ・節	参照箇所 (新潮版)	備考
弘 始	1年	8月	秋	秋分 1～3日 寒露 16～18日	秋分初候 雷乃収声 秋分次候 蛰虫环戸 秋分末候 水始涸 寒露初候 鴻雁来賓 寒露次候 雀入大水為蛤 寒露末候 菊有黄華	上旬 令巽門開門。驍宗の随従・李斎が黄海を 出る 中旬？ 驍宗の随従・李斎、戴へ帰国する 下旬？ 驍宗、即位礼を執り行う	エビローグ	風海 P.372	令巽門は巧に隣接する。巧から戴まで陸路とあるが、騎獣で雲海の下に行くという意味であろう。泰麒が連へ赴いた際の「空行」に近い進み方と考えるならば、10～12日程度の道程か？
		9月	秋	霜降 1～3日 立冬 16～18日	霜降初候 豺乃祭獸 霜降次候 草木黄落 霜降末候 蛰虫咸俯 立冬初候 水始冰 立冬次候 地始凍 立冬末候 雉入大水為蜃				
		10月	冬	小雪 4～6日 大雪 19～21日	小雪初候 虹藏不見 小雪次候 天氣上騰地氣下降 大雪初候 鶡鴒不鳴 大雪次候 虎始交	上旬？ 李斎、瑞州中軍將軍を拜命。鴻基に居を 移す	一章4節	黄昏 P.41 同P.42	北国の初冬、また北国で降雪の開始ならば、暦よりもやや先行させて9月下旬と考えても良いかもしれない。
		11月	冬	冬至 4～6日 小寒 19～21日	大雪末候 荔挺出 冬至初候 蚯蚓結 冬至次候 麋角解 冬至末候 水泉動 小寒初候 雁北郷 小寒次候 鶡始巢	上旬 郊祀を行う 上旬～中旬 冬狩開始の予告 中旬～下旬 泰麒、連へ出立。冬狩開始	二章5節	黄昏 P.118	
	12月	冬	大寒 4～6日 立春 19～21日	小寒末候 雉始雊 大寒初候 鶡始乳 大寒次候 鶡烏厲疾 大寒末候 水沢腹堅 立春初候 東風解凍 立春次候 蟄虫始振	上旬～中旬 泰麒、連へ到着 中旬 泰麒、連を出立。この頃、前文州侯更 迭？花影の心労極まる？ 下旬 文州南部古伯、土匪に占拠される。州師 動く。	華音「冬寒」	華音 P.26 華音 P.52	雨涼宮滞在が三日＋重嶺到着日で、重嶺逗留が計4日。 往路は戴を出るのに一昼夜（＝1日）＋戴柳間の虚海を超えるのに一昼夜（＝1日）、柳・恭・範それぞれの国で4日ずつかかっているとすると、計15日。 復路もまた15日と考えると、往復＋重嶺逗留で合計34日。	
	2年	1月	春	雨水 7～9日 啓蟄 22～24日	立春末候 魚上氷 雨水初候 獺祭魚 雨水次候 鴻雁来 雨水末候 草木萌動 啓蟄初候 桃始華 啓蟄次候 倉庚鳴	上旬 泰麒、戴へ帰国 上旬 白圭宮に「文州に騒乱」の報が伝わる。 驍宗は即座に派兵を決定。翌日～3日後に 英章軍出発 中旬～下旬 英章、琳宇に到着	白銀二章1節・ 二章4節・ 三章6節	白銀① P.56 同P.141 同P.170 同P.144	白銀①の古伯占拠に関する二つの記述が微妙にずれている。阿選が国外にいる時に乱が勃発したという情報なども総合して、年末に古伯が占拠され、年を跨いでそれが国へ伝わったと解釈した。
		2月	春	春分 7～9日 清明 22～24日	啓蟄末候 鷹化為鳩 春分初候 玄鳥至 春分次候 雷乃発声 春分末候 始雷 清明初候 桐始華 清明次候 田鼠化為鴽	上旬？ 古伯の近隣三箇所で土匪の暴動が発生 上旬～中旬 英章軍、古伯を解放。暴動長引く。 中旬 霜元軍と驍宗、鴻基を出立 下旬 雪が緩み始める	黄昏二章3節 白銀三章4節	白銀① P.148 黄昏 P.98	

元号	年・ 置閏月	月	季節	二十四 節気	七十二候	出来事	参照章 ・節	参照箇所 (新潮版)	備考			
弘 始	2年	3月	春	穀雨 7～9日 立夏 22～24日	清明末候 虹始見 穀雨初候 萍始生 穀雨次候 鳴鳩抃其羽 穀雨末候 戴勝降于桑 立夏初候 蟬鳴鳴 立夏次候 蚯蚓出	<p><u>上旬</u> 霜元軍と驍宗、また驍宗の率いる阿選軍二師、琳宇に到着。雪が融け始める</p> <p><u>上旬～中旬</u> 琳宇到着から3日後、驍宗は霜元に指揮官1人と手勢15人の貸し出しを求める</p> <p><u>中旬①</u> 琳宇到着から4日後、俐珪軍急襲を受ける。苦戦の報を英章が驍宗に送ったところ、失踪を確認。翌日計都のみ帰還</p> <p><u>中旬①</u> 宮城において鳴蝕あり、甚大な被害。宰輔失踪。夜、阿選は二声宮の白雉を地中に籠め、雉の足を切る。その場にいた官吏を殺害</p> <p><u>中旬②</u> 計都、陣へ帰還。芭墨、文州へ宰輔失踪と霜元の召喚の青鳥を出す。阿選、白雉の足を所持する</p> <p><u>中旬～下旬</u> 白雉が末声を鳴いたと文州に連絡が来る。霜元、驍宗失踪の報告の為、側近と共に空行で鴻基へ戻る。阿選軍、品堅に率いられ陸路で鴻基へ出発</p>	<p>黄昏三章 4節～6節・ 『戴史作書』 白銀三章5節</p>	<p>黄昏 P.469 白銀① P.162 黄昏 P.210 同P.194 同P.195</p>	<p>驍宗・秦麟の失踪日を某日とする。</p> <p>文州：某前日に驍宗は霜元から精鋭15人を借り受ける。某翌日に計都帰還、その日に霜元が兵卒貸し出しを英章らに打ち明ける。某日から2、3日後に芭墨からの青鳥届く。</p> <p>鴻基：某翌日に霜元から驍宗失踪の青鳥届く。 文州からの青鳥も1日後には鴻基へ届いているところから、芭墨の青鳥も1日後には霜元の許へ届いていると思われる。白雉末声の報がいつ文州に届いたかは不明瞭。青鳥で送ったのであれば、芭墨からの連絡の1日後になるか。州官經由であればそれより1、2日遅い可能性もある。霜元は鴻基への出立直前に末声の報を聞いたか。</p>			
					4月	夏	小満 10～12日 芒種 25～27日	立夏末候 王瓜生 小満初候 苦菜秀 小満次候 靡草死 小満末候 小暑至 芒種初候 螳螂生	<p><u>上旬</u> 霜元、空行で側近と共に鴻基に到着</p> <p><u>上旬～中旬</u> 品堅率いる阿選軍、鴻基に到着。霜元、文州へ戻る？</p> <p><u>中旬?</u> 臥信軍、鴻基を出発</p> <p><u>下旬?</u> 臥信軍、文州に到着</p>	<p>三章6節</p>	<p>白銀① P.172</p>	<p>臥信軍の文州投入と阿選軍の鴻基帰還は入れ違いであろうが、霜元の鴻基-文州の行き来との前後関係は不明。霜元の鴻基到着よりも臥信の鴻基出立がやや後か？ 芭墨が霜元の到着まで10日はかかると発言しているが、これは空行そのものに10日かかるというよりも、青鳥が届くの1日、準備に2、3日かかり、空行が6、7日程度という計算か？雪の中の行軍で文州まで半月、雪が融けてからの承州への進軍が半月であるため、雪のない季節の場合は鴻基～琳宇は半月よりも短い日数（12、3日程度？）がかかると考えられる。空行だとちょうどその半分程度の日数となるか。</p>
								5月	夏	夏至 10～12日 小暑 25～27日	芒種次候 鵙始鳴* 芒種末候 反舌無声 夏至初候 鹿角解 夏至次候 蜩始鳴 夏至末候 半夏生 小暑初候 温風至	<p><u>下旬</u> 文州の土匪の乱、一応の平定を見る。承州辺境に乱あり。</p> <p><u>下旬</u> 李斎、承州へ出発。鴻基見納め。その2日前、李斎と花影は阿選を偽王ではないかと語らう。霜元に軍の半数を率いて承州の李斎を支援せよとの命令あり</p>

元号	年・置閏月	月	季節	二十四節気	七十二候	出来事	参照章・節	参照箇所(新潮版)	備考		
弘始	2年	6月	夏	大暑 10~12日 立秋 25~27日	小暑次候 蟋蟀居壁* 小暑末候 鷹乃学習 大暑初候 腐草為螢 大暑次候 土潤溽暑 大暑末候 大雨時行 立秋初候 涼風至	<p>上旬~中旬 臥信に帰還命令。軍の半数を文州に残し、半数を率いて鴻基へ戻るよう指示あり。霜元、出発間近？</p> <p>上旬~中旬 李斎、承州で二声氏を保護。文州出発直前の霜元に青鳥を、鴻基の芭墨に側近に持たせた密書を送る。李斎側近、道中で阿選軍に捕縛されるか</p> <p>上旬~中旬 霜元、文州出発直前に李斎からの青鳥を受け取る？翌日~数日後、鴻基から「李斎謀反」の報が届く。霜元・英章に李斎討伐の命令下る</p> <p>上旬~中旬？ 英章軍・霜元軍の半数・臥信軍の半数、文州にて離散。</p> <p>中旬~下旬 二声氏保護から10日後、李斎の許に空行師来る。李斎、捕縛されるも鴻基への移動中に逃亡</p> <p>中旬~下旬 霜元と半軍、承州で離散</p> <p>下旬 臥信と半軍も、鴻基入城後一両日中に離散</p>	黄昏三章6節 白銀三章6節	黄昏 P.213 白銀① P.173 同P.174	<p>李斎は二声氏を保護したその日に密書を認めたと読める。密書を預かった側近は空行したと見るのが妥当か。</p> <p>瑞州-承州の州境から数日の地点を出発して鴻基へ行く場合の日数は、霜元の文州-鴻基移動と同じ6、7日程度として試算。</p> <p>霜元へ送った青鳥は次の日には届いたとして扱う。また、李斎の側近は鴻基への道中で捕縛されたと考える。というのも、芭墨が李斎からの密書を受け取っていた場合、李斎の謀反は阿選に露見しなかった筈であり、李斎謀反と聞いた芭墨が異を唱える、という順序にもならなかった筈だからである。側近と密書が道中で阿選の手に落ちた為に、芭墨をも陥れる事が可能になったと見るべきだろう。</p>		
									<p>承州の園糸の里、承州州宰を匿った廉で焼亡</p> <p>回生の父、妖魔に襲われる。</p>	白銀一章1節・二章4節	白銀① P.13 白銀① P.100
元号	年	弘始	5年								
赤楽	1年	弘始	6年(閏11)								
	2年		7年	10月	冬	小雪 10~12日 大雪 25~27日					
				11月	冬	冬至 10~12日 小寒 25~27日	<p>大雪次候 虎始交 大雪末候 荔挺出 冬至初候 蚯蚓結 冬至次候 麋角解 冬至末候 水泉動 小寒初候 雁北郷</p>	<p>この頃園糸の娘、馬州で死亡。園糸、項梁と出会う</p> <p>この頃、藍州で李斎と花影、再会する？</p>	白銀一章1節 黄昏一章6節	白銀① P.16 黄昏 P.69	<p>李斎が10月小雪の頃に瑞州中軍將軍を拜命した際は、山野に雪が積もり始めた程度だった。市街地に雪が降り積もり、凍っているのであればそれよりも一月程度先の時期と考えるのが順当か。</p>
				12月	冬	大寒 10~12日 立春 25~27日	<p>小寒次候 鶺鴒始巢 小寒末候 雉始雊 大寒初候 鶉始乳 大寒次候 鶯鳥厲疾 大寒末候 水沢腹堅 立春初候 東風解凍</p>				
	3年		8年	1月	春	雨水 10~12日 啓蟄 25~27日	<p>立春次候 蟄虫始振 立春末候 魚上氷 雨水初候 獺祭魚 雨水次候 鴻雁来 雨水末候 草木萌動 啓蟄初候 桃始華</p>				
		2月	春	春分 10~12日 清明 25~27日	<p>啓蟄次候 倉庚鳴 啓蟄末候 鷹化為鳩 春分初候 玄鳥至 春分次候 雷乃発声 春分末候 始雷 清明初候 桐始華</p>						

元号	年	元号	年	月	季節	二十四節気	七十二候	出来事	参照章・節	参照箇所(新潮版)	備考
赤楽	3年	弘始	8年	3月	春	穀雨 13~15日 立夏 28~30日	清明次候 田鼠化為鴽 清明末候 虹始見 穀雨初候 萍始生 穀雨次候 鳴鳩抃其羽 穀雨末候 戴勝降于桑 立夏初候 蟬鳴鳴	<u>下旬?</u> 李斎と花影、垂州で別れる?	一章6節	黄昏 P.64	文州では雪融けの時期が穀雨前後。それよりも垂州は南だが、「春とは名ばかりの」が春の盛りの時期にも拘わらず、の意味であるとすればこの時期は概ね立夏以降となる。
				4月	夏	小満 13~15日 芒種 28~30日	立夏次候 蚯蚓出 立夏末候 王瓜生 小満初候 苦菜秀 小満次候 靡草死 小満末候 小暑至 芒種初候 螳螂生		一章1節	黄昏 P.20	「夏の初め」をいつ頃と考えるかによって、李斎の慶来訪時期は随分と変動する。小満はグレゴリオ暦では例年5月20日頃。「夏の初め」にはやや早いと考えた+後で泰麒搜索が本格化するの「夏の盛りごろ」とあり、そちらとの間の期間の辻褃を合わせるために、李斎の来訪を芒種の頃と考えた。
				5月	夏	夏至 13~15日	芒種次候 鵙始鳴 芒種末候 反舌無声 夏至初候 鹿角解 夏至次候 蜩始鳴 夏至末候 半夏生	<u>中旬?</u> 李斎、金波宮を来訪、倒れる <u>下旬?</u> 李斎、金波宮来訪から約半月後に面会可能となる。その翌日延王・延麒、慶を来訪	一章6節・ 二章1節・ 三章2節	黄昏 P.63 同P.80 同P.170	「十日近く」を「十日以上」と解釈した。
				6月	夏	小暑 1~3日 大暑 16~18日	小暑初候 温風至 小暑次候 蟋蟀居壁 小暑末候 鷹乃學習 大暑初候 腐草為螢 大暑次候 土潤溽暑 大暑末候 大雨時行	<u>上旬~中旬?</u> 陽子・六太連れ立って蓬山へ行く。陽子が金波宮に戻り氾王・氾麟と面会。その2日後、延王・延麒来訪 <u>中旬~下旬?</u> 麒麟達による泰麒搜索が開始する	四章3節・4節・ 五章 1節・4節・5節	黄昏 P.276 同P.279 同P.306 同P.337 同P.349	堯天から蓬山までは一昼夜(=1日)、その日は休んで翌日玉葉から話を聞き、直帰したか一泊した後帰ったと考えられる。ならば陽子の出発~帰還の期間は3~4日。陽子の金波宮への帰還から2日後に尚隆と六太が来訪。
				7月	秋	立秋 1~3日 処暑 16~18日	立秋初候 涼風至 立秋次候 白露降 立秋末候 寒蟬鳴 処暑初候 鷹乃祭鳥 処暑次候 天地始肅 処暑末候 禾乃登	<u>中旬?</u> 廉麟と什鉢、傲濫の気配を見付ける <u>下旬?</u> 廉麟が泰麒の気配を教室で見付ける。その次の日の早朝、陽子・李斎・六太が蓬山へ出発。4日後に蓬山へ到着。翌日に碧霞玄君と対話。	五章5節・ 六章3節	黄昏 P.359 同P.360 同P.385	『魔性の子』の作中経過時間は全部で22日(別表1)。麒麟たちの登場と思われるのは第二章末、経過日数で言うならば5日目の夜のこと。廉麟が教室の泰麒の気配に言及するのは第七章末、12日目の夜。美大志望の高三生徒が廉麟を目撃する前日に泰麒の気配を見つけたと考え、傲濫の気配は分かるが泰麒の足取りが掴めない状態だったのは6日程度か? また、そこから泰麒発見まで9日、泰麒帰還までに10日。下記の陽子・李斎・尚隆の堯天~蓬山の往復日数と完璧に一致する。陽子・李斎・六太の蓬山行きは往復8日+滞在日1~2日とする、計9~10日かかっている。
8月	秋	白露 1~3日 秋分 16~18日	白露初候 鴻雁来 白露次候 玄鳥帰 白露末候 蜩始鳴 秋分初候 雷乃收声 秋分次候 蛩虫坏戸 秋分末候 水始涸	<u>上旬?</u> 陽子・李斎・六太、金波宮へ帰還。その日のうちに廉麟が泰麒を捕捉。翌日延王が呉剛の門を開く <u>上旬?</u> 泰麒を連れ、陽子・尚隆・李斎は蓬山へ <u>上旬?</u> 範主従帰国。数日後、廉麟帰国。またその翌日に尚隆帰国。 <u>中旬?</u> 泰麒、目を覚ます。同日金波宮に謀反の動きあり。	六章5節・ 七章1節	黄昏 P.397 同P.399 同P.420 同P.421	李斎が泰麒と共に蓬山へ向かった場合、李斎は飛燕を用いたと見るべきか? 日数は前回と同じであれば4日だが、穢瘴によって昏睡している泰麒を運ぶのに4日もかけることは可能か? とら・たまの内一頭に李斎が騎乗した、それだけ李斎が回復したと考えれば一昼夜で着けるという風にも考えられるか?				

元号	年	元号	年	月	季節	二十四節気	七十二候	出来事	参照章・節	参照箇所 (新潮版)	備考
赤染	3年	弘始	8年	9月	秋	寒露 4～6日 霜降 19～21日	寒露初候 鴻雁来賓 寒露次候 雀入大水為蛤 寒露末候 菊有黃華 霜降初候 豺乃祭獸 霜降次候 草木黃落 霜降末候 蟄虫咸俯	上旬？ 李齋・泰麒、慶を出る 上旬 李齋・泰麒、墨陽山を下る。項梁・去思と出会う。 下旬 泰麒・項梁、鴻基に到着する（別表2）。 同時期、李齋達も琳宇に到着。	費昏七章6節 白銀1章1節・ 『戴史作書』	費昏 P.458 白銀④ 『戴史作書』 白銀① P.13	堯天から垂州まで2～3日程度、そこから墨陽山は1日かからない程度と考えるのであれば、泰麒・李齋が慶を出発したのも9月に入ってからと考えるのが自然か。 白銀④の「戴史作書」には、泰麒が9月中に白圭宮に戻ったと書いてあり、また白銀①P.312の記述は李齋達が琳宇に到着する直前であること、碩杖～琳宇の日数と碩杖～鴻基の日数がほぼ同じであること、白銀①P.321に、李齋達の琳宇到着は東架出発から半月後とあることから、泰麒は9月下旬に鴻基に到着したと考える。 泰麒が待ちぼうけを食った日に見た月は夕食後の時間帯に昇っている月なので、満月～下弦の月の間と見るべきか（一般に、満月は日の入りと共に昇り、下弦の月は真夜中に昇る）。
						立冬 4～6日 小雪 19～21日	立冬初候 水始氷 立冬次候 地始凍 立冬末候 雉入大水為蜃 小雪初候 虹藏不見 小雪次候 天氣上騰地氣下降 小雪末候 閉塞而成冬*	上旬？ 泰麒、阿選に呼び出される。李齋達、函養山へ向かう。 中旬～下旬 李齋達、静之に行き会う。	六章1節・ 七章1節・ 八章2節	白銀① P.312 白銀② P.81 同P.14	白銀①P.312～P.320に見られる文州の描写は全て新月の夜だが、泰麒が白圭宮で待ちぼうけを食った日の夜は月が出ている。P.312の描写は少し時間を先取りしたシーンであると読める。
						大雪 4～6日 冬至 19～21日	大雪初候 鶡鴒不鳴 大雪次候 虎始交 大雪末候 荔挺出 冬至初候 蚯蚓結 冬至次候 麋角解 冬至末候 水泉動*	上旬 李齋達、函養山周辺の鉱山を探索して琳宇に戻る。この頃、基寮死亡。 中旬 李齋達、白琅へ到着。赴葆葉を訪問。 下旬 李齋達、老安を訪問。老安で死んだ者が驍宗であると伝えられる。	十章6節・ 十二章 1節・2節・ 十二章7節	白銀② P.287 同P.328 同P.343 同P.411	日数については別表2を参照。基寮が死亡した日の数日前を11月1日と考えた場合、李齋達の老安到着が11月30日過ぎであるため、李齋達の老安到着付近でちょうど月が改まる可能性あり。 白銀②P.283「姉が倒れたのは、つい先日、父親と連れ立って淵に供え物を流しに行った日のことだった」とあり、一家の長女が倒れたのが11月の新月の日であると分かる。この時、P.283「同時に冷気と風に撒かれた雪が家の中に吹き込んだ」とあり、これが基寮の墓に積もった雪、李齋達が琳宇で見た雪と同じものであると考えられる。
						小寒 4～6日 大寒 19～21日	小寒初候 雁北鄉 小寒次候 鶡始巢 小寒末候 雉始雊 大寒初候 鷄始乳 大寒次候 鶯鳥厲疾	上旬 李齋、建中を介して石林観の沐雨に呼び出される。 下旬 李齋達のもとに、如翰が匿っていた女性が訪問。李齋達を見張っていた詳悉らから、牙門観の動静が判明する。	十四章1節・ 十四章3節・4節	白銀③ P.83 同P.127 同P.149	白銀③P.330「前回の新月の日、父親は籠を流しに行かなかった。（中略）飢えて死んでしまった姉のことを思い出したのだと思う」とあり、一家の父親が籠を流さなかったのが12月1日であると読める。
4年	9年 (興)	9年 (興)	1月	春	立春 7～9日 雨水 22～24日	大寒末候 水沢腹堅 立春初候 東風解凍 立春次候 蟄虫始振 立春末候 魚上氷 雨水初候 獺祭魚 雨水次候 鴻雁来	上旬 詳悉が李齋を再度訪問。赴葆葉との面会の言伝を持ってくる。阿選、朝議に姿を現わす。阿選は驍宗を養う筈だったと回想する。 中旬 李齋達、修行道を通って高卓へと至る。高卓で霜元と再会、話し合う中で阿選の真意に気付く。 下旬～翌月 西崔・龍溪に高卓や白琅から多くの人が流入。鄴都の発案で墨幟の幡を作る。	十六章 4節・6節・ 十七章4節・ 十九章4節	白銀③ P.239 同P.264 同P.322 同P.300 同P.307 白銀④ P.41	白銀③P.322は「月もない夜」とあるため、朔かそれに近い月であることが予想される。P.329の書き方では、阿選が露台で物思いに沈む日と、文州の親子が供え物を流す日は同日であると読め、P.331「新月の夜、と決めているんだ」とあるので、やはりこれが1月1日か。 高卓やその周辺からの西崔・龍溪への人の流入がどの程度の期間続いたのかは不明。友尚率いる王師が鴻基を出立するのが2月末であるため、流入自体は約1月程度続いたと考えると良さそうか。	



元号	年	元号	年	月	季節	二十四節気	七十二候	出来事	参照章・節	参照箇所 (新潮版)	備考
赤 楽	4年	弘 始	9年 (開8)	2月	春	啓蟄 7~9日 春分 22~24日	雨水未候 草木萌動 啓蟄初候 桃始華 啓蟄次候 倉庚鳴 啓蟄末候 鷹化為鳩 春分初候 玄鳥至 春分次候 雷乃発声	<u>上旬~中旬</u> 土遜、泰麒を謀殺しようとする。これが原因で、土遜・張運は失脚。 <u>下旬</u> 友尚、阿選に呼び出され文州への進軍を命じられる。恵棟、阿選を主公と仰げないと泰麒に語る。	二十章2節・ 『戴史乍書』	白銀④ 『戴史乍書』 白銀④ P.73	
				3月	春	清明 7~9日 穀雨 22~24日	春分末候 始雷 清明初候 桐始華 清明次候 田鼠化為鴽 清明末候 虹始見 穀雨初候 萍始生 穀雨次候 鳴鳩抃其羽	<u>上旬</u> 牙門親経由で、鴻基から軍が来るという情報が李斎達にもたらされる。 <u>中旬</u> 友尚、琳宇に到着、土匪の掃討を開始。李斎達、土匪に加勢する。 <u>下旬</u> 李斎ら、友尚軍に勝利し、また驍宗を保護。驍宗、李斎、去思、鄧都らは馬州へ向かう。	十九章6節 二十章1節	白銀④ 『戴史乍書』 白銀④ P.48 同P.62 同P.79 同P.90 同P.153 同P.143	白銀③P.359「ともかくも友尚は琳宇へ向かうことになった。部下を選抜し、一師を編成し、琳宇に到着するまでに約半月というところか」とあり、また白銀①P.144「雪の街道を進むこと半月、英章軍は文州琳宇に到着、その郊外に陣を構えた」と見え、準備を含めれば半月強が経過すると読めるため、友尚の琳宇到着を中旬とした。 禁軍と土匪が戦闘状態に入ったという報が李斎達に齎されたのが満月以降、すなわちその月の16~18日頃。 驍宗の捕縛の日がちょうど月の変わり目の可能性がある(別表2参照)。
				4月	夏	立夏 10~12日 小満 25~27日	穀雨末候 戴勝降于桑 立夏初候 蜩鳴鳴 立夏次候 蚯蚓出 立夏末候 王瓜生 小満初候 苦菜秀*	<u>上旬</u> 阿選、驍宗の足取りをつかみ、魂魄を抜いた帰泉を派遣。驍宗、馬州州境付近で捕縛される。鄧都死亡。文州師、驍宗護送の警備に当たる。 <u>中旬</u> 文州師、白琅を通過。霜元ら、軍勢を糾合する。 <u>下旬</u> 元汲東で文州師と墨幟、衝突。驍宗、琳宇の王師に引き渡される。墨幟の驍宗奪還ならず、潰走。	二十二章3節・ 二十二章5節・ 『戴史乍書』	白銀④ 『戴史乍書』 同P.278 同P.280 同P.292	
				5月	夏	芒種 10~12日 夏至 25~27日	小満次候 靡草死 小満末候 小暑至 芒種初候 螳螂生 芒種次候 鵙始鳴 芒種末候 反舌無声 夏至初候 鹿角解 夏至次候 蜩始鳴*	<u>上旬</u> 浩歌と光祐、それぞれ英章・臥信軍に合流。また、去思を保護。阿選、一月後に驍宗の公開弾劾を行うと発表。 <u>中旬</u> 李斎ら、鴻基へ向けて、三々五々文州を出発。 <u>下旬</u> 臥信が江州城を陥落させる。	二十四章 1節・4節・ 二十五章1節	白銀④ P.397 同P.361 同P.413	
				6月	夏	小暑 10~12日 大暑 25~27日	夏至末候 半夏生 小暑初候 温風至 小暑次候 蟋蟀居壁 小暑末候 鷹乃學習 大暑初候 腐草為螢	<u>上旬</u> 墨幟の驍宗・泰麒の奪還、成功。墨幟、鴻基から江州城へと後退。 <u>中旬</u> 漕州城に王旗、麒麟旗が揚がる。泰麒、蓬山へ。友尚ら墨幟の最後尾、江州に到着。	二十四章4節・ 『戴史乍書』	白銀④ P.403 同P.404	『戴史乍書』の「朝を調う」が王旗・麒麟旗の掲揚の日を指しているという考えもあるが、この時点では泰麒は蓬山におり、実際に「朝を調う」状態ではないため、泰麒の帰国や鴻基からの完全撤退が完了し、政治機構が驍宗の下で整った状態になることが「朝を調う」の指している意味であると考えた。
				7月	秋	立秋 13~15日 処暑 28~30日	大暑次候 土潤溽暑 大暑末候 大雨時行 立秋初候 涼風至 立秋次候 白露降 立秋末候 寒蟬鳴 処暑初候 鷹乃祭鳥		『戴史乍書』	白銀④ 『戴史乍書』	

元号	年	元号	年	月	季節	二十四節気	七十二候	出来事	参照章・節	参照箇所 (新潮版)	備考		
赤 楽	4年	弘 始	9年 (四〇八)	8月	秋	白露 13~15日	処暑次候 天地始肅 処暑末候 禾乃登 白露初候 鴻雁来 白露次候 玄鳥帰 白露末候 羣鳥養羞 秋分初候 雷乃収声						
						間	8月	秋	寒露 16日	秋分次候 蟄虫坏戸 秋分末候 水始涸 寒露初候 鴻雁来賓 寒露次候 雀入大水為蛤 寒露末候 菊有黄華			
									9月	秋	霜降 1日	霜降初候 豺乃祭獸 霜降次候 草木黄落 霜降末候 蟄虫咸俯 立冬初候 水始冰 立冬次候 地始凍 立冬末候 雉入大水為蜃	
				10月	冬	小雪 1~3日	小雪初候 虹藏不見 小雪次候 天氣上騰地氣下降	驍宗ら、鴻基を奪還。阿選を討ち取り、明織に改元。			白銀④ 『戴史乍書』		
						大雪 16~18日	小雪末候 閉塞而成冬 大雪初候 鶡鴒不鳴 大雪次候 虎始交 大雪末候 荔挺出						
				11月	冬	冬至 2~4日	冬至初候 蚯蚓結 冬至次候 麋角解 冬至末候 水泉動						
						小寒 17~19日	小寒初候 雁北郷 小寒次候 鶡始巢 小寒末候 雉始雊						
							12月	冬	大寒 4~6日	大寒初候 鶡始乳 大寒次候 鶯鳥厲疾 大寒末候 水沢腹堅			
				立春 19~21日	立春初候 東風解凍 立春次候 蟄虫始振 立春末候 魚上氷*								

#### タイトルの表記について

・風海……小野不由美『風の海 迷宮の岸』2016年・新潮社

・黄昏……小野不由美『黄昏の岸 暁の天』2018年・新潮社

・華胥……小野不由美『華胥の幽夢』2018年・新潮社

・白銀①～④……小野不由美『白銀の墟 玄の月』第一巻～第四巻 2019年・新潮社

#### 暦についての補足

・1章=19年。章法はメトン周期に基づき、19年に7回置閏する。新章の開始は必ず朔旦冬至となる。

・大小月（30日の月と29日の月）が分からないことから、日に幅を持たせながら半年を目処に二十四節気の配当をずらしている。

なお、置閏直後から節気が前の月に先行して出現するが誤りではない（年内立春など）。

・\*が付いているものは、月の大小等の関係で、前後の月に候が移動する可能性のあるものを指す。

・上旬：1～10日、中旬：11～20日、下旬：21日～29/30日

・後漢四分暦では1年の日数を365.25日とし、1ヶ月の日数を29+499/940=29.53085日としていた。

365.25×19=6939.75=235×(29+499/940) となり、235=12×19+7から、12ヶ月を19回繰り返す中に（則ち19年の中に）7回の閏月を加える（13ヶ月の年を7回設ける）ことで、太陰太陽暦に生じるズレを解消できる。

置閏の頻度については、6939.75÷7=991.4日であることから、991.4日に1回の置閏を行えば良いことになる。991.4日は概数にして2年8ヶ月24日程度。

ここから、32ヶ月～34ヶ月に1度の置閏を行えば良いことになる（国立天文台のHPによれば33～34ヶ月に1回の置閏で良いとのことだが、諸々の便宜上……）。




# 戴国カレンダー

## 別表1 『魔性の子』時系列

作成者：ほしなみ

作成日：2021年9月11日





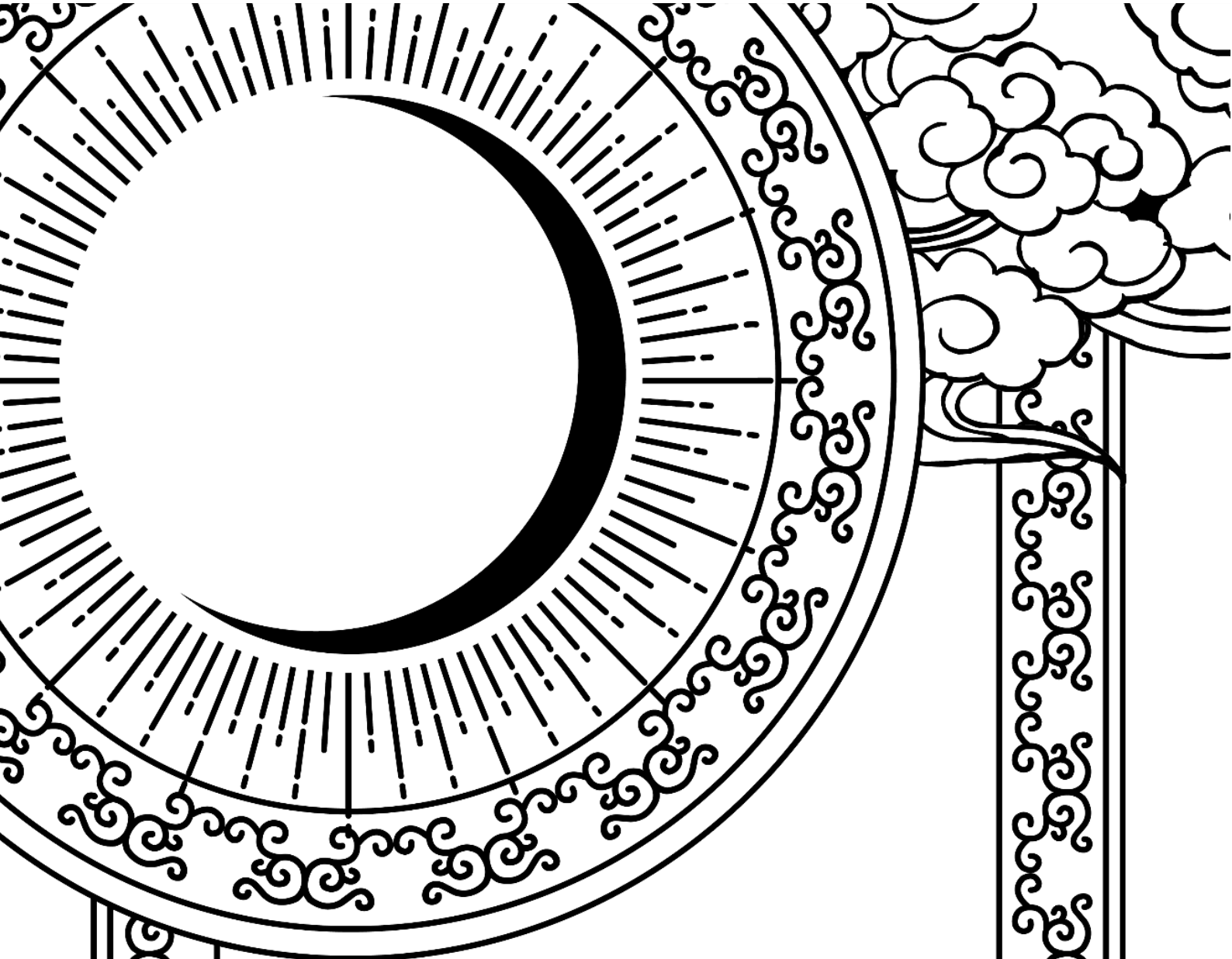
別表1 『魔性の子』時系列

作成者：ほしなみ (@hoshinami629)

2021/9/11

通算 日数	曜日	出来事	『黄昏の岸 暁の天』との連動	章	参照箇所 (全て新版)
1	月	始業式。広瀬の教育実習初日。		1	P.25
2	火	通常授業開始。		1	P.34
3	水	広瀬、高里と初めて一対一で会話する。		2	P.43
4	木	広瀬、高里が神隠しに遭ったという噂を築城から聞く。 広瀬、高里の油彩画を見る。		2	P.50、P.53
5	金	橋本、釘で手を刺す。築城、鋸で足を負傷。		2	P.64、P.67
		団地に住む男性が丸い光から輝く獣が飛び出るのを目撃。	泰麒の郷里の禍々しい気配が傲濫であると気付く。 麒麟がこの地域を念入りに調査し始める（黄昏P.357）	2	
6	土	広瀬、坂田と岩木から高里の周囲に死者が多いと聞く。		3	P.79
7	日	広瀬、橋上・築城の家を訪問。 広瀬、後藤から高里の来歴を聞く。		3	P.82~P.95、 P.97
		男子大学生、海にいた女をニュータウンまで送る。「き、を捜しているんです」と言われる。		3	
8	月	広瀬、高里に臨死体験を語る。高里、神隠しの経験を話す。 岩木、高里に張り手を飛ばす。		4	P.117、P.127
9	火	5限に岩木死亡。	三麒麟による泰麒の気配搜索	4	P.137
		廉麟、竹林で少年に泰麒について尋ねる。「たいきの気配はととても細い」「病んでいるのかもしれない……」		4	
10	水	高里、報復に遭って窓から投げ出される。広瀬、止めに入ろうとして負傷。 広瀬、高里の家を訪問。親子関係の破綻を知る。高里、広瀬の家へ移る。 広瀬、夜中に汕子を見る。		5	P.158~P.162、 P.182
		様々な人が「き、を知らない？」と言う女と一つ目の犬に遭遇。		5	
11	木	体育祭予定日だったが、中止になる。 2-6の生徒11名欠席。屋上から5人の投身が発生。		6	P.225
		堤防で男女が不審な音と気配を見聞きする。「小さな、無数の何か」が堤防を乗り越えたように見えた。	この頃に廉麟、教室に残された泰麒の気配を見付ける（黄昏P.372） その翌日未明、陽子・尚隆・李斎が蓬山へ出立。片道4日、蓬山に最低1泊（黄昏P.385）	6	
12	金	生徒の間で若い女が「き、を知りませんか」と質問する怪談、広まる。 坂田、高里を崇める。		7	P.264~P.267
		廉麟、美大志望の生徒と高里の高校で出会う。「たいきの気配がととても汚れているの。あれは血の穢ではないかしら」「せっかくハンシがここを見つけてくれたのに」		7	
13	土	高里が実名でスポーツ紙に報道される。 広瀬にもマスコミが付き纏い始める。	気配を辿り泰麒本人を搜索	8	P.289~P.292
14	日	広瀬・高里籠城。坂田が広瀬宅を訪問。夜にロライマ山について語る。	陽子・尚隆・李斎、蓬山へ往復	8	P.297、P.303、 P.311
		女子高校生、男子校のクラス棟で女性の人影が動くのを目撃。屋上に犬のような、渡り廊下に牛のような、クラブ棟の上下に蛭のような、中庭に侏儒のような影を見る。また、輝く獣がクラス棟の屋上に舞い降りるのを見た。		8	

15	月	坂田がマスコミに高里の話をリークしていたと築城が話す。高里、退学の意志を後藤に伝える。高里の家族、変死体で発見される。		9	P.338、P.342
16	火	高里が広瀬宅にいることをマスコミに突き止められる。		9	P.349
17	水	高里の家族の遺体を茶毘に付す。広瀬、後藤に自己と高里との同一視を指摘される。		9	P.354～P.363
		高里母、殺される		9	P.364～P.368
18	木	高里の家族の葬儀。山門が崩れてマスコミに死傷者が出る。加速度的に事故拡大。夜、広瀬が高里を罠にかけようとする。高里、聞くまいとする。		10	P.371、P.375
19	金	校長、高里に自主退学を促す。グリフィン、高里と会話する。高里、十二国について思い出し始める。		10	P.386、P.396、P.411
		友人を山門の崩壊で亡くした男性、広瀬のアパートの塀崩れにかかっていたビニールシートが動くのを目撃。捲ると穴が空いていた。		10	P.414～P.416
20	土	警察が広瀬の家に乗り込もうとする。広瀬と高里、十時の家に移る。夜、溺死体のような存在が「レンタイホ」を呼ぶのを聞く。		11	P.427、P.436
21	日	未明に広瀬のアパートで出火。夕方に高里の家に放火。		11	P.439、P.441
22	月	高里、投身自殺を図るも広瀬に食い止められる。レンリンに「死んではいけない」と言われる。夜、嵐の中で高里、十二国へ帰還。		11	P.445～P.450、P.480



# 戴国カレンダー

別表2 『白銀の壺 玄の月』時系列

作成者：ほしなみ

作成日：2021年9月11日







## 別表2 『白銀の墟 玄の月』時系列

作成者：ほしなみ (@hoshinami629)

2021/9/11

全員、もしくは泰麒・項梁、鴻基の人々	参照章・節	参照箇所	通算 日数	月	李斎・去思・鄴都、文州の人々	参照章・節	参照箇所	備考
泰麒・李斎、墨陽山に到着。項梁・園糸・栗、東架に到着。 去思と行き当たり、瑞雲親の協力を得る。	一章	白銀① P.51 同P.52	1	9/11				
一行、東架を出発、鄴都と合流。暮れに小里に到着。	二章2節	白銀① P.115	2	9/12				
小里発、北容着。	二章2節	白銀① P.128	3	9/13				
北容発。			4	9/14				
	四章1節		5	9/15				
項梁の為の騎獣、狛が用意される。	四章1節	白銀① P.184	6	9/16				
			7	9/17				
			8	9/18				
泰麒、困窮した人々を哀れに思う。	四章3節	白銀① P.213	9	9/19				
一行、東架の勢力圏を離れる。	四章3節	白銀① P.218	10	9/20				
碩杖着。	四章4節	白銀① P.219	11	9/21				P.219「碩杖はこの近辺にある最も大きな街だった。江州から文州へ向かう大街道と、同じく江州から瑞州に向かう大街道との交点にある。『そして碩杖を出れば道は登る一方で、これを登り詰めれば文州です』」
早朝、泰麒と項梁出奔。李斎、愕然としつつ旅を続ける。	四章4節		12	9/22				別行動開始。
			13	9/23				
次の日には鴻基に到着するという地点まで来る。泰麒、項梁に白圭宮へ向かうつもりだと打ち明ける。	五章1節	白銀① P.240	14	9/24				泰麒も項梁も騎獣に乗っていたために、鴻基まで4日で移動できた。
夕刻、鴻基到着。白圭宮に通されるも、拘留される。	五章1節	白銀① P.250	15	9/25	この頃李斎達、琳宇に到着。喜溢と面識を得る。	六章2節	白銀① P.321	
泰麒・項梁、待ちぼうけを食らう。この晩、月が昇っている。	五章3節	白銀① P.264 同P.267	16	9/26	建中、李斎達に空き家を貸す。その日のうちに李斎達は浮丘院から移る。喜溢、驍宗を見たことのある荒民の女性を李斎達に引き合わせる。	六章4節・5節	白銀① P.343 同P.347 同P.348	
朝には霜が降りる。淡和、泰麒が拘留されている房室を訪れる。	五章4節	白銀① P.268 白銀① P.270	17	9/27	喜溢、驍宗を知る二人の男女を李斎達に引き合わせる。女性、志邸の里に隣接した廟で、赭甲の人物（烏衡か）と驍宗が話していたのを見た、李斎に話す。	六章5節	白銀① P.353	
			18	9/28	喜溢、また別の男性を李斎達に引き合わせる。李斎、函養山に行く意志を見せる。	六章5節	白銀① P.356	
			19	9/29	李斎達、函養山に関する情報や噂を集める。			情報収集の日数が漠然としているが、白銀①P.371「行ってみないことには始まらない」とあることから、長い間情報収集のみを行っていたとは考えづらいため、2~3日程度と考えた。
			20	10/1				
			21	10/2	李斎達、志邸へ向かう。途中で白幟の老夫婦を見かける。	八章1節	白銀② P.63	
			22	10/3	李斎達、建中を伴って琳宇を出発。	八章1節	白銀② P.71	
	七章1節	白銀② P.10	23	10/4				黄昏P.41「戴は冬に入ったばかり、なのにもう山野をうっすらと雪が覆い始めていた」という記述と、白銀①P.270「これまで霜を見ませんでしたから、例年よりは遅いでしょう。今年はずっとより、少し暖かいように思いますよ」という記述、また前者が10月のことであるという仮説に基づけば、白銀②冒頭は10月初旬と見るのが妥当か。新月の夜の描写と余り時系列が食い違っているとも思えないため、ここを月の変わり目と見る。
			24	10/5		八章2節	白銀② P.75	「三日をかけて」という言葉から、出発日込みで三日と考えた。

全員、もしくは泰麒・項梁、鴻基の人々	参照章・節	参照箇所	通算日数	月	李斎・去思・豊都、文州の人々	参照章・節	参照箇所	備考
			25	10/6	一行、夕刻に岨康付近へ到達。白幟の親子を助け、岨康にいた朽棧に捕まる。	八章2節	白銀② P.75	
			26	10/7	李斎達、朽棧の案内で夕刻に函養山へ到着。坑道を見る。	八章5節	白銀② P.135	
			27	10/8	李斎達、函養山の内部を詳しく検める。	八章5節	白銀② P.151	
泰麒、恵棟に民への援助を要請する。	九章1節	白銀② P.155	28	10/9	李斎達、函養山を出発。李斎達にとってはこの冬最初の雪。	八章5節	白銀② P.151	函養山での初雪と、「北方では雪が降り始めました」とがどの程度連動しているかは難しい問題。函養山は標高が高い分、初雪もかなり早かったのではないかと考えられるが、琳宇周辺は雪の多い地域ではない(白銀①P.339参照)。文州の虚海沿岸は最も北に位置する上、雪も多い為、こちらからの降雪報告が最も早かったのではないかと考えられる。
恵棟、民への援助に関する具体的な返答を用意出来ず。泰麒、返答として土遜の辞職を勧告。土遜、慌てて泰麒の許を来訪。 ここで泰麒の角、癒えきる？	九章1節	白銀② P.156	29	10/10				九章1冒頭の記述は時系列が明らかでない。民への援助に関する具体的な返答が得られず、それ以前から要請していた瑞州侯の実権も得られない為に、土遜への辞任勧告になったと読んだため、このような日数処理を行った。
			30	10/11				
			31	10/12				
この頃の夕刻、恵棟は友尚に泰麒の護衛の増員を相談する。 同日、鴻基で初雪。	九章2節	白銀② P.163	32	10/13	李斎達、琳宇に戻る。雪はその間断続的に降り続けた。	十章1節	白銀② P.220	土遜と泰麒とのやり取りの後、瑞州六官との押し問答が何日程度続いたか。事態が一向に動かず苛立つだけの期間なので、4、5日程度と考えた。
			33	10/14				
この頃、張運は泰麒に阿選登極の指示を仰ぐ。	九章3節	白銀② P.189	34	10/15	喜溢、李斎達二人の男を紹介する。	十章1節	白銀② P.226	
			35	10/16	李斎達、南斗へ向けて出発。	十章2節	白銀② P.230	
			36	10/17	李斎達、南斗着。聞き込みを行う。	十章2節	白銀② P.230	
この頃、耶利の主は耶利を泰麒の侍官に紛れ込ませることを画策。	九章5節	白銀② P.215	37	10/18	李斎達、銀川を訪れる。夜に静之達と行き会う。	十章2節	白銀② P.230	
			38	10/19	李斎達、南斗に戻る			
			39	10/20	李斎達、琳宇に戻る	十章5節	白銀② P.261	
			40	10/21	喜溢、瑤山の鉱山遺構に驍宗が逃れた可能性を示唆。	十章5節	白銀② P.265	琳宇に何日後に戻ったかの明記がないが、静之と出会った夜が明ければ南斗に戻ったであろうし、そこから琳宇までは往路との同じく1日の旅程の可能性が高い。
			41	10/22	李斎達、函養山へ再度出発。	十章5節		琳宇到着の次の日の朝に李斎達が相談をし、更に次の日に函養山に出発したと見るべきであろう。
			42	10/23				
			43	10/24				
			44	10/25	岨康着。朽棧不在。	十章5節	白銀② P.266	
			45	10/26	李斎達、岨康発。杵臼が案内につく。	十章5節	白銀② P.266	前回は琳宇～岨康は前回徒歩で4日の旅程。2回目は琳宇から馬に乗って来た可能性も否定できないが、それならば岨康～函養山の旅程が2日にならない筈なので、今回も徒歩であろうと判断し、琳宇～岨康も徒歩でやはり4日の旅程と計算した。
			46	10/27	函養山着。朽棧に面会。	十章5節	白銀② P.267	
			47	10/28	李斎達、仲活に案内されて山奥の鉱山町を探索。荒民の死体を見付ける。	十章5節	白銀② P.276	函養山で朽棧に会った後、仲活が登場するが、こちらは馬に乗っている。函養山で朽棧が馬を貸してくれたと見るべきか。
			48	10/29	李斎達、再び山奥を探索。澗溝など廃墟を回るも収穫は得られず。	十章5節	白銀② P.278	
			49	10/30	函養山発。	十章5節	白銀② P.282	
			50	11/1	岨康着。	十章6節	白銀② P.283	白銀②P.288の粉雪と、李斎達が琳宇に到着した際に積もっていた雪、また驍宗に供え物をする父子の家に吹き込む雪は同じ雪だと考えられる。
			51	11/2	岨康発。			

全員、もしくは泰麒・項梁、鴻基の人々	参照章・節	参照箇所	通算日数	月	李斎・去思・豊都、文州の人々	参照章・節	参照箇所	備考
			52	11/3	この頃、基寮死亡。 驍宗に供え物をしていた父子の内、娘が一人死亡。	十章6節	白銀② P.283 同P.287 同P.286	白銀②P.288の粉雪と、李斎達が琳宇に到着した際に積もっていた雪、また驍宗に供え物をする父子の家に吹き込む雪は同じ雪だと考えられる。深く積もった訳ではないという記述がP.328に見えるため、2、3日の降雪と理解した。また老安の経済的な事情や基寮を匿っていたという状況から、土葬であり、死亡後すぐに埋葬を済ませたと考えた。
			53	11/4				
			54	11/5	琳宇着。琳宇は雪に覆われていた。	十二章1節	白銀② P.328	
			55	11/6	琳宇に路上で凍死する人が発生。	十二章1節	白銀② P.328	
この頃、鴻基で降雪。平仲の様子、奇怪。	十一章1節	白銀② P.290 同P.291	56	11/7				文州で雪を降らせた雲が鴻基に南下したと仮定した場合の日程。
平仲、姿が見えず。項梁の疲労蓄積。	十一章1節	白銀② P.291	57	11/8	凍死者を助けなかった女、押し込み強盗に殺される。	十二章1節	白銀② P.330	
この頃、張運は泰麒に追い詰められ、土遜を罷免することに同意。	十一章2節	白銀② P.300	58	11/9	喜溢、李斎達に赴葆葉の噂を持ってくる。	十二章1節	白銀② P.331	
恵棟、州宰に任じられる。	十一章3節	白銀② P.304	59	11/10	李斎達、琳宇を出発。			
			60	11/11	李斎達、嘉橋に到達。	十二章2節	白銀② P.338	
			61	11/12	李斎達、驍宗が消えた辺りを通り過ぎる。	十二章2節		
この頃、耶利が泰麒に仕え始める。	十一章4節	白銀② P.321	62	11/13	李斎達、鞆田方面へと向かう街道の分岐点に到達。	十二章2節		
			63	11/14				
この頃、項梁と泰麒二人だけで会話。泰麒、阿選は王ではないと断言。泰麒、夜に小寝の阿選を訪問。その後、張運に黄袍館への出入りを禁じる。	十三章1節～5節	白銀③ P.10 同P.20 同P.30 同P.55	64	11/15				恵棟の州宰就任を聞いて以来、ということは、就任が決まってから数日後と考えた。
張運、泰麒の専横を阿選に訴える。	十三章6節	白銀③ P.56	65	11/16				
			66	11/17	李斎達、白琅着。	十二章2節	白銀② P.338 同P.343	
			67	11/18	李斎達、白琅発。			
			68	11/19				
			69	11/20				
			70	11/21				
			71	11/22				
			72	11/23				
			73	11/24				
			74	11/25	李斎達、琳宇着。帰着当日に飛燕の世話、習行が李斎達を訪問、老安の話題を提示。すぐに剣を調達。	十二章3節	白銀② P.356 同P.364	
			75	11/26				
			76	11/27	静之・習行、琳宇を出発。	十二章4節		
			77	11/28	静之・習行、夕刻に老安着。静之、基寮の遺品を驍宗の物であると告げられる。報告のために夜だが馬を飛ばして琳宇へ向かう。	十二章6節	白銀② P.387 同P.406	
			78	11/29				
			79	11/30	喜溢、李斎を訪問。新王登極の噂を確かめるために共に石林観へ。その間に静之が帰着。	十二章4節・5節	白銀② P.364 同P.386	
			80	12/1	李斎、琳宇発。	十二章7節		さすがの李斎も、話を聞いた当日に出発したとは考えづらい。
			81	12/2	李斎、老安着。驍宗だと言われた人物に墓参。一行、悄然。この夜、回生も老安発。	十二章7節	白銀② P.411 同P.420	
			82	12/3				

全員、もしくは泰麒・項梁、鴻基の人々	参照章・節	参照箇所	通算日数	月	李斎・去思・鄴都、文州の人々	参照章・節	参照箇所	備考
			83	12/4				
			84	12/5				
			85	12/6				
			86	12/7	回生、石林観の門を叩く。	十四章1節	白銀③ P.86	どの場合も、基本的には出発日を1日経過日と数えて記述しているが、回生のように深夜に出発した場合の日数換算をどうすべきか微妙。石林観に深夜に到着したと考えれば、出発日=1日経過日と考えても支障はないか？
この頃、土遜が内宰に就任。	十五章1節	白銀③ P.158	87	12/8				罷免のほとぼりが冷める必要があるだろうと考え、罷免から一月後を想定した。
			88	12/9				
			89	12/10				
			90	12/11				
			91	12/12				
この頃、泰麒達は正頼の救出に向かう。潤達、泰麒や項梁、耶利と仲間になる。	十五章1節～5節	白銀③ P.174	92	12/13	李斎、建中を介して石林観の沐雨に呼び出される。白幟の人々とも友誼を結んだ後、飛燕に騎乗して夜に岨康着。そのまま岨康に宿泊。以後西崖に宿泊することを決定。 その晩はひどくふぶく。	十四章1節・2節	白銀③ P.83 同P.124 同P.127	白銀③P.124「馬でも一日かかる道のりが四半日もかからない」馬と騎獣(天馬)の速度差の目安になる。 白銀③P.159「だが、その日から土遜の傍迷惑な献身が始まった。日に三度は機嫌を伺いにやってくる。(後略)」とあるため、土遜の内宰就任から泰麒が正頼を探しに行く日までは数日の間があることが分かる。土遜と泰麒のやりとりの長さから5日程度が経過していると考えた。
阿選、黄袍館へ突然の出現。泰麒に叩頭を強要する。	十六章1節・2節	白銀③ P.217	93	12/14				
			94	12/15				
			95	12/16				
			96	12/17				
			97	12/18				
			98	12/19				
			99	12/20				
			100	12/21				
			101	12/22				
			102	12/23				
			103	12/24				
			104	12/25	沐雨から如翰への手紙、浮丘院に届く。	十四章3節	白銀③ P.137	
			105	12/26	喜溢が李斎達に一人の女性を引き合わせる。女性、阿選軍が函養山で何を行っていたかを語る。 李斎と静之、牙門観の詳悉と端直に出会う。詳悉と端直、葆葉に驍宗の行方を知る荒民に心当たりがないか聞くと約束。	十四章3節・4節	白銀③ P.127 同P.149	李斎が岨康に宿泊してから正確に何日後のことであるか不明。月の日数を合わせる必要もあり、少し間を空けた。
			106	12/27				
			107	12/28				
			108	12/29				
阿選、露台に行んで過去を振り返る。	十七章4節	白銀③ P.322	109	1/1	文州の親子、12月には控えていた供え物を流す。	十七章4節	白銀③ P.330	
			110	1/2				
この頃、阿選は朝議に出席。惠棟を瑞州の州宰に任じる。 巖趙、泰麒の大僕として働くようになる。	十六章6節・7節	白銀③ P.264 同P.273	111	1/3	年が明ける。 詳悉と端直、再び李斎を訪問。李斎・静之・去思は牙門観へ、建中・鄴都はその間に琳宇から西崖への引越し準備。	十六章4節	白銀③ P.239	そんな年末年始に活動的になるのか？とやや奇妙な感じがしないでもないが、言葉通りに捉えるのであればここで年を跨ぐ。
			112	1/4				
			113	1/5				
			114	1/6	李斎・静之・去思、白琅の牙門観へ到着。李斎達、赴葆葉と面会。夕刻には敦厚と引き合わされる。	十六章5節	白銀③ P.240	詳悉と端直が即日引き返すのは現実的ではないと考え、李斎訪問の翌日に琳宇を出発したと考えた。

全員、もしくは泰麒・項梁、鴻基の人々	参照章・節	参照箇所	通算日数	月	李斎・去思・酈都、文州の人々	参照章・節	参照箇所	備考
			115	1/7	李斎達、牙門親を出発。葆葉から騎獣を贈られる。 夕麗、李斎達と牙門親の連絡係として李斎達に同行。塙の場所を案内される。	十六章5節	白銀③ P.261	
			116	1/8				
			117	1/9	李斎・静之・去思、琳宇に到着。葆葉からの情報を酈都と建中に連絡、今後の方針を練る。建中、修行道を李斎達に通る為の許可を石林観へ求める。	十七章1節	白銀③ P.288	十七章冒頭が李斎の琳宇到着当日であると直接分かる箇所はないが、酈都・建中と合流してすぐに相談したと考えるのが自然だろう。
			118	1/10	李斎達、拠点西崖に移す。卓央山への修行道の案内役として梳道が同道することになる。	十七章1節	白銀③ P.288	白銀③P.289「乗騎を使って行けば卓央山までは三日の距離だという。二泊は完全な露営になるからその準備が要る」とあるが、何処から三日の距離なのか不明。琳宇を起点に三日の意味だとすると、二泊三日の旅程であるため、安福での一泊が野営ではないことと矛盾するので、修行道に入ってから（則ち安福の東側の巡礼路・修行道の分岐路にある廟から）三日で卓央山の意味と取った。
			119	1/11	李斎達、琳宇を出発。安福で一泊。	十七章1節	白銀③ P.290	
			120	1/12	安福発。李斎・静之・去思は修行道に入る。修行道に軍のやり方をした道路補修の痕跡を見付ける。 この日は溪流近くで野宿。	十七章1節	白銀③ P.294	
			121	1/13	李斎、松の根元に塚を見付ける。複数人がこの修行道を越えた事を察する。	十七章1節	白銀③ P.294	
			122	1/14	李斎達、卓央山へ到着。その後卓央山の麓の高卓へと進んだところ、道端で癸魯と再会。そのまま霜元とも再会する。 李斎達、話す中で驍宗が函養山に閉じ込められている可能性に思い至る。	十七章2節・3節	白銀③ P.300 同P.303 同P.307 同P.321	
			123	1/15	李斎・霜元達、高卓の宗教者達と会談。函養山の大捜索について相談する。	十八章1節	白銀③ P.339	李斎と霜元が高卓の人々と相談をしたのが、再会後何日後か正確な記述は存在しない。しかし内容の重要性から鑑みて、翌日か翌々日には相談する機会を持ったと考えた。
			124	1/16	李斎、高卓を出発。	十八章1節	P.341	李斎が高卓を出発した正確な日には分からないが、霜元を待たずということは会談の翌日と見るのが妥当か。修行道を引き返したとあるため、西崖までの旅程と安福までの旅程はほぼ同じと考える。
			125	1/17				
			126	1/18	李斎、西崖着。西崖にいた朽棧に函養山の捜索について報告し、許可を取り付ける。	十八章1節	P.343	
			127	1/19				
			128	1/20				
			129	1/21				
			130	1/22				
			131	1/23				
			132	1/24				
			133	1/25				
			134	1/26				
			135	1/27				
			136	1/28				
			137	1/29				
			138	1/30				
			139	2/1				
			140	2/2				
			141	2/3				
			142	2/4				
			143	2/5				
			144	2/6				
			145	2/7				
			146	2/8				

全員、もしくは泰麒・項梁、鴻基の人々	参照章・節	参照箇所	通算日数	月	李斎・去思・豊都、文州の人々	参照章・節	参照箇所	備考
この頃、士遜が泰麒の謀殺を計画。これを理由に士遜・張運、失脚。	十九章2節・5節	白銀④ 『戴史作書』 同P.47	147	2/9				士遜と張運の失脚の正確な日付が分からないため、『戴史作書』の記述に従い、大まかに2月と考える。また2月末には友尚が鴻基を発つ筈であるため、二人の失脚は白銀③の十八章での出来事よりも前の段階で起きていると思われる。同じ鴻基での出来事でも、友尚・恵棟パートと張運・士遜パートとで語りが分かれており、必ずしもそれら全てが時系列順に配されていないと考えた。
			148	2/10				
			149	2/11				
			150	2/12				
			151	2/13				
			152	2/14				
			153	2/15				
			154	2/16				
			155	2/17				
			156	2/18				
			157	2/19				
158	2/20							
159	2/21							
この頃、友尚は阿選に驍宗を迎えに行くよう指示される。	十八章3節	白銀③ P.356	160	2/22				白銀③P.359「部下を選抜し、一師を編成し、琳宇に到着するまでに約半月というところか」という記述と、白銀④P.144「雪の街道を進むこと半月、英章軍は文州琳宇に到着、その郊外に陣を構えた」という記述を併せて考えるに、鴻基を出発してから琳宇までが半月、部下の選抜や編成でもう数日という計算になると考えた。
			161	2/23				
この頃、恵棟は辞任の意志を泰麒に伝える。泰麒は慰留、驍宗が王であると明かす。	十八章4節	白銀③ P.364 同P.367	162	2/24				恵棟は友尚の文州行きを聞き、衝撃を受けて辞任を決意したと考えられるため、友尚への進軍指示から数日後であると考えた。
			163	2/25				
			164	2/26				
			165	2/27				
166	2/28							
この頃、友尚軍が鴻基を出発。	二十章2節	白銀④ P.73	167	2/29				
			168	3/1				
			169	3/2				
			170	3/3				
			171	3/4				
			172	3/5				
			173	3/6				
			174	3/7				
			175	3/8				
			176	3/9				
			177	3/10				
178	3/11							
179	3/12							
180	3/13							
鴻基に友尚の琳宇到着の報、届く。恵棟を文州侯に任ずることが決定する。	二十章2節	白銀④ P.62 同P.73 同P.75	182	3/15	友尚軍、街道に沿って函養山へ北上を開始。	二十章1節	白銀④ P.63	友尚の琳宇到着が午後なので、そこから青鳥を飛ばした場合、国官の上層部、例えば叔容や阿選に報告が届くのは翌日になるのではないかと予想した。
恵棟、文州侯任命の報せを受ける。	二十章2節	白銀④ P.76	184	3/17	友尚軍、岨康の間近に迫り、岨康を陥落させる。夕刻には土匪は岨康から後退、安福に逃げ込む。夜には西崔の李斎達に、土匪と禁軍の戦闘の報が入る。霜元と李斎、大いに議論。建中、空正、清玄、博牛ら、独自に土匪を助けるべく出発。	二十章1節・3節	白銀④ P.68 同P.79	

全員、もしくは泰麒・項梁、鴻基の人々	参照章・節	参照箇所	通算日数	月	李斎・去思・豊都、文州の人々	参照章・節	参照箇所	備考
			185	3/18	友尚軍、安福へ移動、攻城戦。土匪、友尚軍からの攻撃に耐えて籠城。	二十章4節・5節	白銀④ P.91	
この頃、恵棟が鴻基を出発。			186	3/19	土匪の籠城2日目。烏衡、痺れを切らして赭甲と共に軍営を離脱、安福の西側の廬を襲う。建中ら、赫甲と交戦するも逃げられる。烏衡、一つ前の廬に戻ると驍宗に遭遇。離脱して軍営に逃げる。建中ら、その後驍宗を拘束。友尚、烏衡から驍宗に遭遇したと報告を受ける。友尚が派遣した二両、赭甲の虐殺に憤慨し士気を下げる。探索遅滞。夕刻、安福後略を中断して友尚が探索に加わるも、指揮系統混乱。朽棧、禁軍が西へ来たのを見て、足止めを思いつく。	二十章4節・5節	白銀④ P.93 同P.98 同P.105 同P.107 同P.110 同P.114	
			187	3/20	明け方近く、友尚軍の指揮系統回復。安福への退却がてら、朽棧らに攻撃。李斎ら援軍二千、間一髪のところ朽棧の救援に間に合う。その後癸魯らの援軍二千、弘宏ら空行師約二両、来る。	二十章5節・6節	白銀④ P.116 同P.121 同P.124 同P.126	
			188	3/21	李斎達、阿選軍の掃討、残党の捕縛。深夜、李斎達は捕虜を連れ函養山手前の崔峰の廃墟に帰着。西崔から来ていた霜元と合流、その後驍宗と再会。墨陽山から雁へ向かう計画が定まる。友尚、阿選への疑念から敵軍の人々をうらやむ。	二十章7節	白銀④ P.130 P.131 P.134 P.143	
			189	3/22	驍宗、潞溝へ向かう。李斎と霜元、崔峰にて友尚と会話。	二十章8節	白銀④ P.144	
			190	3/23	友尚とその麾下、自軍の兵卒らと一人ずつ話す。深夜、全員が霜元らに下ると表明。	二十章8節	白銀④ P.153	
			191	3/24	未明、驍宗一行は崔峰を出発。見送った霜元ら、崔峰から撤収、潞溝へ後退する。友尚と霜元、項梁が英章らに接触した可能性に思い至る。	二十章8節・二十一章2節	白銀④ P.160 同P.177 同P.186	
文州にて友尚軍が壊滅したとの報、鴻基に届く。烏衡、同時に驍宗脱出や土匪の実情を阿選に報告。文州に李斎がいる事、伝わる。阿選、追加の派兵を決定。玄管、李斎を生き延びさせたいと考える。	二十一章1節	白銀④ P.163 同P.176 同P.177	192	3/25	驍宗一行、鞅田を離れて最初の街で宿泊。	二十一章3節	白銀④ P.192	「文州から空を駆け戻ってきた」とは、雲海の上を移動した可能性もある。もし雲海の上を空行したのであれば翌日に鴻基着、雲海の下であれば徒歩半月程度の道程を空行したのだから、どんなに速くとも5日程度は見るべきか。烏衡も同時に鴻基へ帰着しているところから、今回は雲海の下を通ったと考えた。また、霜元に鴻基から王師が動き出したという報告のあった日の前日を王師の先遣隊出発日と考えた場合、阿選の進軍指示はその更に前日である可能性が高く、この日に友尚軍壊滅の報が鴻基に伝わったとみた。
王師の先遣隊、鴻基を出発し始める。			193	3/26	驍宗一行、街道を離れて山野を進む。	二十一章3節		白銀④P.206「文州師一軍または二軍、王師は一軍だ」とあり、白銀①P.143「禁軍一軍の威容をもって文州の民に、もはや土匪を恐れるには及ばないことを示す」とあることから、英章の文州進軍と今回の王師の文州進軍は規模が近いと考えられる。白銀①P.144「不眠不休で手はずを整え、翌日には先遣の一師が鴻基を離れた。以降、一師ごとに順次街道を北上して文州へと向かう。しんがりの項梁軍が英章と共に鴻基を発ったのは、三日後のことだった」とあることから、今回の進軍も白銀④P.176の阿選の進軍命令の翌日に先遣隊が鴻基を出発、その3日後に最後尾が鴻基を出発したと考えたが、これだと霜元らから見た王師の文州到達までの日数が早すぎる。



全員、もしくは泰麒・項梁、鴻基の人々	参照章・節	参照箇所	通算日数	月	李斎・去思・鄧都、文州の人々	参照章・節	参照箇所	備考
			194	3/27	驍宗一行、白琅に近づく。街道に戻る。 夕麗、白琅を出発し霜元らへ敦厚からの報告を伝えるに行く。	二十一章 3節	白銀④ P.192	李斎達が詳悉らに伴われて白琅に行った際は出発日含めて三日掛かっていた。驍宗らも大々的には空行していない為、ほぼ同日数掛かったと考えた。「街道を逃れて間道に入ったのは五日目」という記述とも合う。
			195	3/28	驍宗一行、街道を再び逸れ、間道へ。夕方に南雪道に入る。	二十一章 3節	白銀④ P.192	
			196	3/29	州師が動き始めていると、敦厚から霜元らに報告。	二十一章 4節	白銀④ P.202	
			197	3/30	驍宗一行、南雪道を逃れる。馬州へ向かう山深い街道を進む。 鴻基から王師が北へ向かっているとの連絡あり。友尚・霜元、烏衡は鴻基に戻っていない可能性が高く、阿選は驍宗の居所を知らないと予想。 静之、朽棧ら土匪に逃げるよう忠告するが、却って墨幟に加わると言われる。	二十一章 3節・4節	白銀④ P.193 同P.203 同P.210	「三日を経て」は、南雪道に入った日を一日とカウントして三日目に南雪道を逃れた、の意味であると考えた。
王師の最後尾、鴻基を出る。			198	4/1	定撰の里、土匪の焼き討ちに遭う。李斎と驍宗、消火と救出を手伝うが、途中で里を後にする。彦衛、李斎ら旅の一行の人数が途中で一人減ったことに気付く。	二十一章 3節	白銀④ P.200	正確なことは分からないが、定撰と彦衛の里の名が南牆か。
			199	4/2				
阿選、驍宗が南牆を通ったと知る。夜、帰泉の魂を抜く。	二十一章5節	白銀④ P.211 白銀④ P.217	200	4/3				阿選が驍宗の足取りを掴んだのは驍宗が南牆を越えた後だが、把握までに要した日数は不明。帰泉らの移動や捜索の日数、県城から白圭宮まで話が伝わる時間などを考え、このような日取りを考えたと。
阿選、烏衡を殺害。帰泉に驍宗探索を命じる。帰泉ら空行師、鴻基を出発。	二十一章5節	白銀④ P.217	201	4/4				帰泉らが南牆周辺へと到着するまでの日数から考えるに、馬州州都の威稜か、文州州都の白琅か、どちらかの凌雲山までは雲海の上を行っただと考えられる。
泰麒、阿選に詰め寄るも目論見を暴かれる。嘉馨、捕縛される。	二十一章6節	白銀④ P.222 同P.231	202	4/5	琳宇に王師が到着しはじめるが、動く気配なし	二十二章 1節	白銀④ P.239	
			203	4/6	霜元ら、琳宇の王師が動かないことを訝しむ。玄管から李斎宛ての書簡、霜元に届く。霜元、浩歌の率いる15騎を驍宗らの許へ派遣。 驍宗一行、馬州との州境近くに迫るも空行師に襲撃される。一行、瓦解。鄧都死亡、驍宗捕縛。去思、羅睺に騎乗して江州へと逃走。 浩歌、驍宗を捕縛した空行師を追跡。李斎と泓宏、潞溝へ戻る。 夜、夕麗が潞溝を訪問。文州師が動いたことを報告。その直後に李斎、潞溝に戻る。	二十二章 1節～3節	白銀④ P.244 同P.239 同P.240 同P.242 同P.272	白銀④P.244の記述は入り組んでいて分かりにくい。南牆が彦衛らの里の名だとして離れた次の日が1日目だった場合の5日目がこの日。離れた日当日から数えると、帰泉らが驍宗を捕縛する日までの日数が合わない。 また、潞溝から馬州との州境付近までの移動が、騎獣でどの程度の時間を要するかも不明。もしかすると前日に浩歌らが派遣されていたかもしれない（その場合、李斎の潞溝帰着がその日の内であった事と矛盾すると考えた為、同じ日に全てが動いたと考えた）
			204	4/7	恵棟、如雪を通過。	二十二章 3節	白銀④ P.279	英章や友尚など、鴻基から文州までの大規模な進軍が約半月。それに比べて除雪や移動時間の点から、恵棟の方が数日遅れると考えた。想定している出発日から18日後の到着と仮定した。
			205	4/8	恵棟、文州城に到着。敦厚、落胆。	二十二章 3節		
			206	4/9				
			207	4/10				
			208	4/11				
			209	4/12				
			210	4/13				
			211	4/14				



全員、もしくは泰麒・項梁、鴻基の人々	参照章・節	参照箇所	通算日数	月	李斎・去思・豊都、文州の人々	参照章・節	参照箇所	備考
			212	4/15	文州師、白琅着。	二十二章 3節・4節	白銀④ P.278	文馬両州の境で驍宗を捕縛し、それを州師が護衛しながら白琅へと戻るまでに10日～半月程度かかる。次に白琅から琳宇方面へ向かう際、宧汲までで7・8日、嘉橋までで10日程度かかる。よって州師のが州境から宧汲まで来るには、17～20数日程度かかる計算。 一方霜元らは最初の10日程で西崖において兵を糾合、すなわち人員の集合を待ち、残りの10日程で宧汲へと向かうというスケジュールであると思われる。白銀④P.278「こちらも猶予は十日」の猶予とは、兵力の糾合に使える猶予の意味か。
			213	4/16	文州師、白琅を出発。	二十二章 3節・4節		
			215	4/18				
			216	4/19				
			217	4/20				
			218	4/21				
			219	4/22				
			220	4/23				
			221	4/24				
			222	4/25	文州師、宧汲着。	二十二章 4節		
			223	4/26	文州師、宧汲を出発。	二十二章 4節		
			224	4/27	宧汲東にて、墨幟軍と文州師が衝突。	二十二章 4節	白銀④ P.280 同P.281	
			225	4/28	州師、墨幟の攻撃を受けつつも嘉橋付近で王師と合流。 墨幟の主立った面々、西崖へ一旦撤退。朽棧、死亡。飛燕、李斎を庇って死亡。	二十二章 4節	白銀④ P.283	
			226	4/29	墨幟、最後の攻勢に出る。 文州師、白琅の牙門観を急襲。それとは別に文州師、西崖に迫る。西崖の戦えない者達、喜溢に伴われ潞溝へ避難。西崖、この日から翌日にかけて激しく攻撃される。 敦厚、掃討戦の混乱に乗じ白琅から逃亡。	二十二章 5節	白銀④ P.303 同P.304	李斎や霜元らが西崖を出てから潰走まで何日程度あったか不明だが、琳宇から瑞州との州境まで、王師が一日では踏破できないと考えた為、2日が経過したと考えた。西崖を攻撃した文州師も、恐らく白琅から攻め上ってきており、こちらも西崖を一日で急襲、壊滅、撤退までしたとは考えにくい。 敦厚の白琅離脱がいつ頃なのかは正確には分からないが、掃討戦の混乱に乗じたとあり、また牙門観が攻撃に遭う段階では脱出していないと危険であろうと考え、この日であると考えた。
			227	4/30	墨幟、文州と瑞州との州境へ接近するが、力及ばず潰走。驍宗を護衛した王師、瑞州防衛線の向こうへ消える。 光祐、白琅まで二日の距離に来たところで墨幟の潰走を知る。馬州への逃亡を決断。 夜、馬州師に墨幟潰走の報せが届く。浩歌、それを察知して馬州への逃亡を決行。	二十二章 5節・6節	白銀④ P.292 同P.292 同P.294 同P.295 同P.296	瑞州防衛線は文州と瑞州の州境近くを指すか。P.303の記述からそれに近いものであると想像できる。 馬州師に青鳥が届いたのは、距離から言っても墨幟が潰走した当日中と考え、浩歌の馬州行きもこの日の夜であると考えた。
この頃、東架の里家の食料、尽きかける。園糸、淵澄と会話。	二十二章5節	白銀④ P.298	228	5/1	浩歌、未明に英章・臥信軍と合流。臥信ら、兵力を江州へとふりむける。	二十二章 5節・二十四章4節	同P.397	園糸が淵澄と会話したのがいつ頃なのか正確には分からないが、物語の順序からこの辺りかと想像した。
この頃、阿選は六朝議の席で驍宗の弾劾について話す。案作、冢宰に任じられる。 泰麒の謹慎、形の上でのみ解ける。嘉馨や州六官長の処刑が泰麒に告げられる。 驍宗、この日までは王師内にいたと確認が取れる。	二十三章2節	白銀④ P.307 同P.313 同 白銀④ P.319	229	5/2				

全員、もしくは泰麒・項梁、鴻基の人々	参照章・節	参照箇所	通算日数	月	李斎・去思・豊都、文州の人々	参照章・節	参照箇所	備考
淵澄、死去。 泰麒、六朝議に再び出席するようになる。 この辺りで、驍宗は托飛山へ護送される。	二十二章5節	白銀④ P.299	230	5/3				
			231	5/4	この頃、敦厚が西崔に到着。墨幟の生き残りに逃亡を勧める。	二十三章1節	白銀④ P.304 同P.305	白琅から西崔までの道程がどの程度の日数が不明だが、馬に乗って移動した場合に白琅から琳宇までが8日の旅程であるため、それより少し短い6日程度と想像。山道を進むため、もしかすると琳宇までの旅程とさほど変わらない可能性もある。
			232	5/5	この頃、英章・臥信の軍が去思と羅睺を保護。去思から事情を聞き、雁に使者を派遣。	二十四章4節	白銀④ P.399	去思は発見当初意識不明だったのだから、使者を派遣したのはもう少し後の事だった筈だが、そもそも去思を保護した時点が分からないため、同日にまとめた。英章・臥信らが江州へと軍勢を振り向けてから数日後と思われる。
			233	5/6				
この頃、王師が鴻基に帰着。			234	5/7	この頃、玄管から李斎の許へ青鳥が来る。李斎ら、約一か月後に驍宗が処刑されると知る。	二十三章3節	白銀④ P.327	瑞州州境から鴻基までの所要日数は具体的には不明。碩杖から鴻基と琳宇から鴻基が距離的にはかなり近く、騎獣に乗った泰麒と項梁が、降雪前の時季に4日で鴻基に到着していた。徒歩の場合は仮に、その倍を計上して8日と考えた。
この頃、朝議で驍宗断罪の具体的な手法が定まる。 泰麒、潤達を東架へと逃がす。	二十三章2節	白銀④ P.321 同P.325	235	5/8				
			236	5/9				
			237	5/10				
			238	5/11				
この頃、潤達は東架に到着？	二十五章3節	白銀④ P.426	239	5/12				潤達が東架に到着した正確な日付は不明だが、「探し出し」とあるため、到着まで数日を要したと考えた。
この頃、潤達はとらを墨陽山の隧道に放つ。	二十五章3節	白銀④ P.426	240	5/13				
			241	5/14				
			242	5/15	この頃、李斎は文州を出立。	二十四章1節	白銀④ P.361	鴻基到着より二十余日前に文州を出発したと想定。西崔から移動していた可能性があるため、大まかに文州と考えた。
			243	5/16				
			244	5/17				
			245	5/18				
			246	5/19				
			247	5/20				
			248	5/21				
			249	5/22				
			250	5/23				
			251	5/24				
			252	5/25				
この頃、臥信が江州城を陥落させる。 江州の高官と主立った兵卒を建物に籠め置いた。	二十五章1節	白銀④ P.413	253	5/26				臥信が江州を陥落させたのがいつ頃なのか曖昧だが、鴻基から江州へと後退する軍勢が漕溝へと到着するのに十日を要しているため、同日数を想定した。戦闘がない分、もう少しこちらの日数は短い可能性もある。
臥信、鴻基へ進軍。入れ替わるようにして光祐、江州城に入城。江州春官長、他の官吏を説得し墨幟に恭順を示す。	二十五章1節	白銀④ P.413	254	5/27				「一日をおいて入れ替わるように」の意味が取りづらいが、江州城陥落の翌日に臥信は鴻基へ、それと同日に光祐が江州城に入城、の意味であると読んだ。また、英章が光祐について白銀④P.416「光祐はよく働いた。碩杖からここまで、兵卒を率いて驚異的な速さで駆け付けたんだ」と述べており、碩杖から江州までの高速移動は、この時のことであった可能性が高い。
			255	5/28				
			256	5/29				
			257	6/1				
			258	6/2				
			259	6/3				
			260	6/4				
			261	6/5				

全員、もしくは泰麒・項梁、鴻基の人々	参照章・節	参照箇所	通算 日数	月	李斎・去思・豊都、文州の人々	参照章・節	参照箇所	備考
耶利、鴻基の検問の様子を見に行く。 泰麒に翌日のことを約束する。 李斎、鴻基に到着。皋門に近い道観で 霜元、静之らと合流する。 驍宗、托飛山から白圭宮へと護送され る。	二十三章5 節・二十四 章1節・2節	白銀④ P.350 同P.355 同P.360 同P.361 同P.374	262	6/6				
驍宗の処刑日。正午に弾劾が開始。泰 麒や李斎ら、驍宗を奪還。英章・臥 信、鴻基へ進軍し奪還を補佐。 墨織、その日の内に鴻基の南の県城ま で後退。	二十四章	白銀④ P.327	263	6/7				正確な日にちが分からないため、李斎らが玄管からの青鳥 を読んでからちょうど30日後に設定した。
			264	6/8				
			265	6/9				
驍宗ら、空行にて漕溝城へ到着。李 斎、延麒と尚隆に再会。驍宗、尚隆に 助力を乞う。	二十四章4 節	白銀④ P.404	266	6/10				
李斎、泰麒を連れて蓬山へ出立。	二十五章2 節節	白銀④ P.422	267	6/11				
漕溝城に墨織・禁軍・瑞州師・江州師 の旗、王旗・麒麟旗が掲げられる。	二十四章4 節	白銀④ P.404	268	6/12				
			269	6/13				
			270	6/14				
			271	6/15				
花影、漕溝に到着。李斎、これを出迎 える。	二十五章2 節	白銀④ P.416	272	6/16				
王師と戦いながら後退して来た兵卒、 江州城に到着。最後尾の友尚も到着。 品堅、李斎と言葉を交わす。李斎、光 祐や彼の率いる昔からの兵達と再会す る。	二十五章1 節	白銀④ P.409	273	6/17				



# 戴国カレンダー

## 本表

### 別表1 『魔性の子』時系列

### 別表2 『白銀の墟 玄の月』時系列

作成者: ほしなみ (<http://seisatoka.lomo.jp>)

表デザイン・編集協力: しぐま

作成日: 2021年9月11日

表紙・裏表紙はてんぱるさまの素材をお借りしました。

てんぱるさま pixiv: <https://www.pixiv.net/users/2513282>

この本は個人的に作られた非公式ファンブックです。原作者さまや出版社さまとは一切関係ございません。